自由シリーズ　シャウド10：
「悟りへの期待」
ジェフリー・ホップによるアダマスのチャネリング
クリムゾンサークル
2013年8月3日
www.crimsoncircle.com

私は、〈私は在る〉であり（I Am that I Am）、自由かつ至高なる存在、アダマスです。

あぁ！　深くたっぷりとした呼吸をしてください。これら全てのエネルギーをここにグラウンドさせてください。あともう少しで、私たちはあなた方のいる領域への移行を完了し、直接ここであなた方といられるようになります。

深くたっぷりとした呼吸をしてください。このシャウドを始めた瞬間から、エネルギーがどれほど美しく、また素早く変化したかを感じることができたでしょうか？　ええ、直前には、そこそこ良い感じの音楽も掛かっていましたしね。（聴衆から少し笑い。アダマスもくすくす笑う）（注：　アダマスが話し始める前に、ニック・ウラタ（Nick Urata）の『彼女は本物』（“She's Real”）という曲が流れていた）

さて、今日の話を始める前に、またエネルギーがさらに変化してしまう前に、このライブ映像をただ興味本位で初めて見ている人たちに対して、一つ忠告しておこうと思います。「あなたたちは今すぐこのサイトを閉じた方がいいでしょう。」　なぜでしょう？　なぜでしょう？　それはここが極めて特別な集まりだからです。よくあるニューエイジではありません。単にスピリチュアルな知識を学ぶだけの集まりではありません。ここに集まっているのは、世界各地からこのコロラドにやって来た者たちであり、この肉体を持った生涯で悟りを得ようと献身している者たちなのです。

私たちが経験していることは、人生を一変させてしまうような劇的なことです。必ずしも楽なことであるとは限りません。私たちがシャーンブラと呼ばれるこのグループとともに経験していることは真正なものです。自分自身の真実へと連れて行ってくれるものです。（アダマスは一人の男性に向かって）私たちの経験していることは真実ではありませんか？　ピート。それは、必要とあればあなたの膝にも連れて行きます。そしてまた、地獄のどん底にも天国の絶頂にも連れて行きます。それは常に変化していきます。

私たちが経験していることは全く万人向けではありません。（アダマスはくすくす笑う）　ええ、全くもってそうではありません。

ですから、あなたたちが、もし単に興味本位な気持ちでこれを見ているならば、ただ面白半分でこの空間に足を踏み入れようとするならば、あるいは、もし何らかのエネルギーをここから盗もうと思っているならば、このチャネリングのエネルギーを吸い取ろうと考えているならば、今すぐこのサイトを閉じてください。というのも、そうしないなら、後で、あなたにとって困った事態が生じるかもしれないからです。（アダマスはくすくす笑う）

それでは、ようこそ、シャーンブラよ。自由シリーズにおける最後のシャウドにようこそ。あぁ、自由シリーズ最後のシャウドです。

自由

自由。よく言われるように、自由とは「失うものが何もないこと」を意味するのでしょうか？　（アダマスはビデオカメラの方を向いて）まだ見てますか？（聴衆から少々笑い）　もしあなたたちに失うものがまだ残っているなら、今日それらを全部捨て去ることになりますよ？（アダマスはくすくすと笑う。聴衆からも笑い）

さて、私たちは今、自由シリーズにいます。究極的には、「悟り」とはまさに「自由」そのものなのです。自分自身で在る自由。自分を完全に表現する自由。自分を抑えつけるあらゆる物事からの自由。「クリスタルの牢獄」にあなたを閉じ込めておこうとする物事からの自由。誰の世話も受けることのない――どこかにいる神の恩恵すら受けることのない――〈私は在る〉（I Am）でいる自由。

これは驚くべきことではありませんか？　ですがあなたは、このようなことを聞くと、いつもこう考えます。「うーん、親とか先生とか天使とか、そういったレベルのものなら全部手放せるけど、恩恵に与っている神に対しては、必ずしもそこまでする必要はないんじゃないだろうか？」　私が先ほど言った「神」というのは、「純粋な神そのもの」のことを指しているのではありません。というのも、〈スピリット〉あるいは〈永遠なる一者〉は、一切のルールや規則なしに、一切の期日や期限なしに、その他どんな制限や条件もなしに、自らをあな

たに与えたからです。そしてこう言ったのです。「行きなさい。そして、あなたのなりたいものになりなさい。〈私は在る〉でいなさい。」

ただし、そのためには多くの責任を引き受けねばなりません。私たちが話したように、このことは実際には数年前から始まっているものです。人間たちの多くは自由を本気で求めてはいません。彼らはより楽な生活（人生）を望んでいますが、「真の自由」に関しては必ずしも望んでいるわけではありません。しかし、あなたはそれを選んでいます。私はそう信じています。あなたは「自由に伴う責任」を引き受けています。もちろん、それがいつも楽なものであるとは限りません。この悟りと呼ばれるものは簡単なものではありません。おそらく、あなたがこれまで考えていた以上に多くの困難があります。多くの難局が待ち構えています。

悟りに対するとても多くの期待……それが今日、この自由シリーズ最後のシャウドにおいて、私たちが話す内容です。悟りへの期待。それは今なお残っている数少ない問題です。挑戦的で難しい課題であり、悟りの障害となっているものです。私たちは今からその話に入っていきます。ですので、深く呼吸をして、願わくばそれを越えて行きましょう。

悟りと呼ばれているもの……これは、それほど簡単なものではありません。あなたは悟りについて人間レベルの見識を持っていましたが、それは実際のものとは程遠いものでした。しかし、それが悪いと言っているわけではありません。なぜなら、あなたが――もしくは、あなたの〈私は在る〉が――最後に望んだことが、人間アスペクトの思い描く「自分自身の悟り」だったからです。（聴衆からやや笑い） たった今、「なんとも不器用な創造物がいたものだ！」という思考が、あなたのマインドを駆け抜けていきました。（アダマスはくすくすと笑う） この悟りと呼ばれるものは、誤解やバランスを欠いた認識でいっぱいになっています。今日私たちがあなた方から聞くであろうことでいっぱいになっています。

ですから、人間たちがこの悟りと呼ばれるものをいくら思い描き、それに向けて取り組んだとしても、結局のところ、それが実際に悟りに寄与するということはないでしょう。なぜなら、そのようなことは制限に他ならないからです。もし仮に、人間たちが「私はこの方法で悟りを得るつもりだ」とか「これが悟りの何たるかだ」などと言えたとしたならば、そこには非常に多くの制限や偏った考えやバランスを欠いた認識が存在していたことでしょう。そして、人間たちは悟りに関するエネルギーを貪り続けていたことでしょう。〈私は在る〉という真のアイデンティティではなく、人間のアイデンティティの方を称え続けていたことでしょう。集合意識（大衆意識）や自分自身の過去、人間マインド、創造性なき分析的思考といった、悟り以外のあらゆる要素に、完全に振り回されていたことでしょう。そういうわけで、「悟りというのが、人間がこれまで考えていたようなものではないということ」は実際、望ましいことなのです。

あなたの人間アスペクトである部分が今、ここで座っています。あなたの人間アスペクトは幸いにも、この悟りと呼ばれているものを許しています。「許すこと」は、思い描くことや考えることとは全く違います。全くもって異なるものです。あなたはただそれを許しています。「許すこと」「当然のこととすること」、私たちは先月のシャウドでそのことについて話しました。それは途方もない信頼を必要とします。これまでのところ、そのレベルにまで至った人はほとんどいません。

もちろん、時としてそれが難しいものであることは私も承知しています。あなたが最悪な状況を経験しているとき、その内的苦痛を経験しているとき、私はあなたのすぐ側にいます。大抵は夜になってからですが、あなたに寄り添います。私はあなた方一人ひとりのことを本当に誇りに思っているのです。あなたは、そのような嵐の真っ只中にあっても、ただ深く呼吸し、そして自分自身の最も純粋な場所から、「私は〈私は在る〉である」と言うことができるからです。

あなたはもはや、内なる敵や内なる悪魔と戦おうとはしません。自分のこれから進んでいく道を解明しようとはしません。悟りというものを自分で考え出したり思い描いたりしようとはしません。あなたはただ、深く呼吸し――深くたっぷりとした呼吸をし――そして「私は〈私は在る〉である」と言うのです。

ガイダンスがほとんどないこと

悟りが認識されるこの地点において、難しいことの一つは……いま私は「認識」という言葉を使いましたが、それは「悟りは既にここに在る」からです。あなたはそのことを知っています。自らの悟りを認識するということ、それに気づくということ、それは「自分の中に既に在るもの」への自覚を自らに許すということです。

悟りが認識される――あるいは実感される――この段階に

おいて難しいことの一つは、それに関するガイダンスが現時点ではほとんどないことです。全くと言っていいほどありません。ですが、それもまた望ましいことなのです。

あなたは、私や他の天使的存在から、若干のガイダンスを受けたことがあります――といっても、それはガイダンスというよりも挑発に近いのかもしれません。しかし、あなたに理解してもらいたいのは、自らの真の「至高なる主権性」を認識し受け入れている人間や天使的存在はまだあまり多くはない、ということです。このことをどうか理解してください。ちなみに、それを認識し受け入れている者たちのことを、あなたはアセンデッドマスターと呼んでいますが、彼らはまだ極めて少数です。9000 人ちょっとですが、今、増えていってはいます。ええ、もちろん、あなた方によってです。ただし、まだその数は非常に少ないのです。確かに、人類のために働いている存在はいます。ですが、彼らは「自分たちは人類のために働いていますが、これは自分自身のために行なっていることでもあります」と言っているはずです。ですから、一体どうして彼らが、現在のあなたをガイドすることができるのでしょうか？　彼ら自身、それについてよく知らないのです。

私はここであなた方に伝えておこうと思いますが…………今、カウルダーと少し内的対話をしました。私たちは話を進めます。（聴衆から少々笑い）　現在、人間たちによってチャネリングされている多くの存在がいます。素晴らしく、また美しい存在です。ですが彼らはまだ、彼ら自身の「自由」と「至高なる主権性」を認識する地点には至っていません。あなた方と同様、依然としてそれを探求しています。ですから彼らが、別次元の存在だからといって、何かの母艦に乗っているからといって、あるいは、有名で傑出した過去世を持っているからといって、彼らがあなたよりも理解が進んでいるというわけではないのです。

あなたは今、悟りの認識を経験する地点にいます。それは時には厳しいものかもしれません。この場所はガイダンスがほとんどない地点なのです。なぜなら、あなたを実際にガイドできる存在が、現時点ではほとんどいないからです。あなたが何を経験しているのか、あなたがなぜそのような経験しているのかを、実際に理解している存在はほとんどいません。天使的存在であろうとその他の存在であろうと、それを本当に理解している存在は、ほとんどいないのです。もちろん、少数ながら、それを実際に理解している者たちもいますが、彼らは彼らで、「あなたに悟りの認識をあなた自身だけで経験させるには、今は身を引いて見守るときだ」と知っているために、あなたにガイダンスを与えることを控えているのです。

さて、この段階でガイダンスがほとんどないというのは、ひどい仕打ちのように思えます。それは実際、拷問を受けているような状態かもしれませんが、時に美しくもあるものです。私たちは月に一度集まります。毎月、私はここに来て、あなた方の悩みやドラマや「私とコミュニケーションを取る際にどれくらい大文字を使うか」に応じて、話をします。（アダマスが、「自分は文字を全て大文字で書いたりはしない」という、シャウドの始まる前のジェフリーの発言に言及したので、聴衆から笑い）　もちろん、（大文字でも小文字でも）どちらであろうと構いません。私は乙女座生まれではありませんでしたから。（訳注：　ジェフリーは乙女座生まれ）　実を言うと、私が今日のシャウドをいつもより短めにする予定でいるのは、今日が……私の誕生日だからです。

リンダ：　おー、本当？！　（最初、聴衆の反応が小さかったので、アダマスが両手を使って煽るような仕草をすると、聴衆から拍手喝采）

アダマス：　サン・ジェルマンとしての私の生涯において、今日は私が生まれた日でした。ですから、私は――

リンダ：　獅子座ね。

アダマス：　獅子座、ええ、そうですね。（リンダはくすくす笑う）　私は毎年この日を私の祝うべき誕生日としています。そういうわけで、私たちは今晩、ちょっとした祝賀会を開きます。アセンデッドマスターズ・クラブでささやかなパーティを行います。シャウドを途中で切り上げるようなことはしませんが、今日は私の誕生日なのです。

リンダ：（ハッピーバースデーの歌の替え歌で）ハウ・オールド・アー・ユー？　ハウ・オールド・アー・ユー？

アダマス：　それは良い質問ではありませんね。（アダマスはくすくすと笑う。聴衆から笑い）（リンダに向かって）あなたはいくつですか？　あなたが自分の歳を言うなら私も言いますよ。

リンダ：　58 歳よ。ラ、ラ、ラ。

アダマス: やれやれ、私は大体、308 歳くらいですかね。

リンダ: おぉーぅ。(誰かが「元気そうに見えるわ！」と言うと、アダマスも聴衆も笑う)

アダマス: 実際、とても元気みたいですよ。これはカウルダーですから！(聴衆から「あぁーー」という声と多くの笑い。アダマスもくすくす笑う)

リンダ: あぁーー！ うぅーー！

アダマス: さて、どこまで話したでしょうか？ 私たちが話していたのは――おっと、私は真面目な口調で話していましたね――この段階においてはガイダンスがほとんどないということでした。ですが、それは望ましいことなのです。

実際、それは時に困難なものです。どこかの存在に援助を求めても実際にやって来る者はあまりいないことに、毎回気づきます。それは暗闇の中で叫ぶようなものです。誰も聞いていないわけではありませんが、彼らは「あなたがそれを自分独りでやらねばならないこと」を理解しているのです。これは困難なことではありませんか？ 困難なことです。

もう何年も前のことですが、あなたは自分のガイドたちを手放しました。自分と繋がっていたとても多くの存在を手放しました。自分自身で選択を行えるようになるためです。時に暗闇の中で選択するときがあるとしても、とにかくあなたは自分自身で選択を行なうようになります。それが真にあなた自身の選択であるとき――つまり、天使的存在に影響されることなく、どこかの師や指導者に影響されることなく、一切誰の影響も受けることなく、あなたが自ら選択をするようになるとき――あなたは「その選択における深遠さと真実性」を感じるようになるのです。

あなたは非常に深い観点から物事を見ることができるようになります。ドラマへのありがちな分析を超えていきます。というのも、あなたは、ある状況に面したとき、しょっちゅう、そのような分析をしているからです。あなたは大抵、ドラマの観点から選択をしています。起こり得る可能性やシナリオを予測し、その感情から選択しています。ですが、それはマインドによって喚起された感情なのです。あなたはそのとき、マインドの予想した展開を感じているにすぎないのです。

人が――今のあなたのように――ガイダンスなしでやっていくとき、その者は自分自身の中により深く入って行かなければなりません。まさしくドラマや恐れを越えて行かなければなりません。ですが多くの場合、単に恐れという観点から選択がなされています。大抵の場合、自分の目の前にある全てのシナリオの中で最も恐ろしくないものを、ただ単純に選択しています。

あなたが今経験しているこの段階では、興味深いことも起こっています。以前のあなたは、死というものを恐れ、自分から最も遠ざけてきました。ドラマに入り込んでマインドによる感情的な決断がなされる際、あなたはよくこう言っていました。「もしかして、これは死につながったりするのだろうか？ 特に、ひどい死を招いたりはしないだろうか？」 そして、その可能性があると分かったら、それを避けてきました。

ですが興味深いことに、現在のあなた方の多くにとって、死とはそのような要素では全くありません。もはやそういったものではなくなったのです。なぜなら、あなた方は今、ある意味「魂の最も暗い闇夜」を経験している最中だからです。あなた方の中には、もはや自分がここにいたいのかさえ、自信が持てなくなっている人もいます。死ねば解決されるだろうと考えている人すらいますが、それはありません。そうはなりません。死ぬと突然、ものすごい洞察力が開花するとか、抱えている問題が消え去るとか、そういったことにはならないのです。起きることは単にあなたが死ぬということだけです。(聴衆からやや笑い) それ以外のことは依然としてそのままです。ですから、そのようなことをするくらいなら、ここにいて、解決策を見つけ出すか、解決されるのを許すかする方が良いのです。

とは言え、あなたがこれまでこういった感情的要素――恐れの感情――に基づいて選択してきたというのは事実です。あなたは最も恐ろしくないシナリオを選んできました。しかし、あなたは今、それを越えて行くのです。自分自身の真実の中へと、より深く入って行くのです。

あなたは、悟りと呼ばれるものの視点から、自由という視点から、行動していきます。あなたを自由にするものは何なのでしょうか？ あなたに最大レベルの気づきをもたらすものは何なのでしょうか？ 〈私は在る〉をあなたの人生に統合するものは何なのでしょうか？

仮にあなたが自分の人生の問題に関するたくさんのガイダンスを受けていたとするならば――あなた方の中にはまだ

時々それを求めている人もいますが――あなたはいまだに他人の指示に従っていたことでしょう。ですから、それを本当に理解している存在がほとんどいないというこの状況は、実際には望ましいことなのです。

あなたが時に孤独を感じることは、私も承知しています。あなたは時々、自分の訴えを誰も聞いていないのではないかと思ったりしますが、誰よりも先に私が聞いています。ですが私は、必ずしもそれに返答するというわけではありません。ただし、たまには、ちょっとした挑発を返すことはあるかもしれません。時折、こうささやくかもしれません。「〈私は在る〉。それを思い出してください。〈私は在る〉ですよ。」 それは本当に小さなささやきです。

あなたは最悪な物事を経験することがありますが、自分がどれだけ打たれ強いかについて気が付いているでしょうか？ これは、これまで人間として生きたことのある誰しもに言える、驚くべきことなのです。他の存在が全く理解していないことです、この「人間の打たれ強さ」というものは。人によっては、単に頑固さと呼ぶ人もいるかもしれませんが。（アダマスはくすくすと笑う）

リンダ：（手を叩きながら）そう、私たちよ！

アダマス：または、意志の強さとも言えますね。

リンダ：そう、私たち！

アダマス：ええ、そうですね。あなた方は、この打たれ強さという力、困難な状況を生き抜いていく能力を持っています。その状況は、もしかしたら、死に直結するような状況や、生死に関わるような事態であるかもしれません。あるいは、何かとんでもないことを実行しようとしている人たちと一緒になるというような状況かもしれません。しかし、あなたはそのような状況を経験するのを許すことができます。自らの内なる〈私は在る〉の支持とともにそれを許し、正気を取り戻して微笑むのです。

ええ、それは難しいことです。それは私も分かっています。時々諦めてしまいたくなるのも理解しています。しかしどういうわけか、そのような最も暗い瞬間でさえ、あなたは深く呼吸してこのように言うことを思い出すことができるのです。「私は在る。私は存在する。そうだ！ 私は存在する！ だから、私に不可能なことなんてない！」

あなたが――私たちが――前に進んでいくと、外部からのガイダンスが実に少ないことに気が付きます。ですが、あなたはいずれ、それが本当にありがたいことだったと真に理解するようになるでしょう。そして、自分自身に心から感謝することでしょう。

もちろん、私たちは今日のような集まりを続けていきます。しかし、あなたがこれまで頼ってきた他の存在や他の人々は、もうあなたには必要ありません。あなた自身が創り出した存在……どういう意味か分かりますよね？ （ノーマに向かって）あなたは分かりますね。（アダマスはくすくす笑う） つまり、あなたが自分の外側に――実際には内側に――創造した様々なアスペクトのことですが、そういったものも、もう要りません。それらはますます少なくなっていき、自らの真実を発見することがますます多くなっていくでしょう。それは本当に本当に望ましいことなのです。

質問

悟り……自由……この悟りと呼ばれているものには、多くの期待が存在しています。あなたは二千年前にこの悟りの舟に乗り込みました……今の表現は少し面白かったですね。（聴衆から少し笑い） そして、今なお私たちは、舟を漕ぐのをやめてはいません。（アダマスはくすくすと笑う）

あなた方は現在、一人ひとり異なる様々な理由から、この悟りの道にいます。もし自分自身のその理由を感じたければ、二千年前に戻ってみてください――中には、それよりもっと長い人もいますが。あなたのその理由とは何なのでしょうか？ あなたはこれまで人間としての数多くの生涯を経験してきました。あなたは人類の偉大なる時代のいくつかを経験しました。有名であったり裕福であったりした生涯もありました。馬小屋から肥やしとなるフンをかき集めたりした生涯もありました。とても幼くして亡くなった生涯もありました。殺されたり殺したりした生涯もありました。そのようなあらゆる生涯を経験してきました。

ですが、それはなぜなのでしょうか？ どういった理由でこのような全てを始めたのでしょう？ 天上にいるどこかの存在がそれを決めたのではありません。天国に操作パネルのようなものがあって「OK、あなたは悟りに向かう時です」などと決定しているわけではありません。それをしたのはあなたなのです。ある時点になって「もうその時だ」と言ったのは、

全アスペクト・全生涯を貫いて存在している、あなたの〈私は在る〉だったのです。

少しの間、そこに戻って感じてみてください。詳細に入る必要はありません。その本質を感じてください。二千年に渡って多くの多くの生涯を経験するという道をあなたに踏み出させた、その理由を感じてください。

お決まりの人間の生涯には退屈さが付きまといます。なぜなら、しばらくすると――と言っても、二、三百の生涯を経験した後、といったところでしょうが――それらはほとんど似たり寄ったりのものになるからです。本当に、ほとんど同じような生涯になるのです。

あなたをこの悟りの道に入らせる理由となったものとは、人生にうんざりした気持ちでしたか？　それとも、人間としての経験を持つことへの辛さや厳しさでしたか？　恐ろしさでしたか？　苦痛でしたか？　もう耐えられないという気持ちでしたか？　そういったものも悪くない理由です。それら以外で、あなたをこの道に連れて来たものは何かありますか？　あなたを教会や修道会や寺院などで過ごす生涯へと導いたものは何でしたか？　あなたはその後、この少し前の生涯で、そういったものすら全て投げ捨てました。「グループはもうたくさんだ。組織はもうたくさんだ。レトリックはもうたくさんだ。経典だとか聖典だとかそういったものはもうたくさんだ。」そう言って、あなたはそのような全てから立ち去りました。そして、この生涯になって、あなたは、シャーンブラと呼ばれる、この非常に緩やかに組織された楽しいグループに戻って来たのです。

そうした一連の生涯を経て、あなたをここまで導いて来た、その理由とは何だったのでしょうか？

このようなことはあなた方にとって当たり前のことですが、ほとんどの人間はまだその段階にすら到達していません。彼らはそういったことを深く考えたりは全くしません。〈私は在る〉が実際にどういう意味なのか、見当もつきません。ほとんどの人間は教会が教えるレトリックをそのまま鵜呑みにしているだけです――「神は天におられる」とか「死後、天国に行けるよう正しく生きよ」とか。あなたがしているような「自分自身の中に深く入っていくこと」に取り組んでいる者はほとんどいません。

人々の中には、あなたのことを自己中心的だと言う人もいるでしょう。「あなたがどれほど自分自身にばかり関心を向けているか見てみなさい。どれほど自己耽溺しているか考えてみなさい」と言う人もいるでしょう。ですが私に言わせてもらえば、全ての人間は遅かれ早かれそうするのです。最終的には皆が「内なる気づき」に向かうことになるのです。それを強制することはできません。それは自然に起こります。いずれ彼らの「内なる自己」は、彼ら自身の〈私は在る〉によって呼び起こされ、こう言うことでしょう。「さあ、それに取り掛かろう。さあ、取り掛かろう。」

では、二千年前、あなたにそう決意させた理由とは何だったのでしょうか？

しばらく、それをただ感じてみてください。私は別に、サイキック能力を使えとか、その詳細まで調べろと言っているわけではありません。ですが、あなた個人のアカシックレコードの中には、非常に重要なものが存在しています。全宇宙的なアカシックレコードというものはありません。それは全て個人的なものです。そこにあるものを感じてみてください。あなたをこの道に足を踏み入れさせた理由……それは何だったのでしょうか？

（小休止）

もし今、それを感じることができないようなら、今晩、横になったときにやってください。または、明日以降、散歩に出たときにやってください。それは何だったのでしょうか？

さて、それは実際、この最終的な地点・最終的な選択へと繋がっていく一連の生涯において、常に存在していたものでした。そして私たちは、この自由シリーズを締めくくるに当たって、あなたに質問があります。「〈私は在る〉を見出す旅を始める」という決意をあなたに生じさせたもの……それは実際、果たされたのでしょうか？　それが質問です。ここで私が言っているのは、必ずしも〈私は在る〉を認識することではなく、その動機についてです。あなたが人生にうんざりしていたことが理由でその決意が生まれたのでしょうか？　それとも、恐れが理由だったのでしょうか？　あるいはひょっとしたら、イェシュアのような、人の心を揺り動かし強く感化させる存在に出会ったのが理由だったのでしょうか？　ええ、もちろん、イェシュアとはあなたであることを思い出してください。それはほとんど、あなたにとって、未来の自分の一部分を見ているようなものだったのです。

その動機——あなたをこの道へと入らせた理由となったもの——は、今私たちがこの新しい時代に入り、満たされたのでしょうか？　果たされたのでしょうか？　それが最初の質問です。

その答えは興味深いものとなるでしょう。私は、日記を書いている人たちに——その中でも特に〈キーハック〉（Keahak）の人たちに——来月のシャウドまでの間、これを書き留めておくようにお願いしたいと思います。ええ、それは宿題です——あなたが選ぶなら。それを記録しておいてください。あなたはそれに驚くことでしょう。もしかしたら、その答えに圧倒されることさえあるかもしれません。答えは、私やアーンドラや他のどこかの存在からはやって来ません。ですから、それを見つけようと外に目を向けないでください。（アダマスはハートに手を置いて）答えはここからやって来ます。それは驚くべき新事実、新発見となることでしょう。

悟りへの期待

では次です。悟りに対するたくさんの期待……（アダマスは演台を前に持ってくる）これが出てくるときは、私たちが真剣になるときです。あなた方は皆「あーあ！」とか「あちゃー！」と言いますが。……（アダマスは演台に両手を置いて）悟りへの期待です。

この道が始まったのが二千年前であろうと二百年前であろうと、あなたは今この生涯にいます。そこには「この生涯で悟りを認識する」というある種の「内なる選択」——そして、それが実現する高い潜在性——が存在しています。人間的自己もある程度はそれに沿って進んでいきます。ある意味、スピリチュアルな DNA が組み込まれたようなものです。「分かった。この生涯で悟りを認識する。」

あなたが生まれた瞬間から……というよりも「あなたが自分のエネルギーを肉体に注ぎ入れ、それが完了した瞬間から」と言うべきでしょうか。なぜかというと、「肉体が産まれる瞬間」と「肉体と実際に一体化する瞬間」との間には大きな違いがあるからです。本当に一体化するのは、肉体が産まれてから数ヶ月経った後かもしれないのです。私は、妊娠中絶反対（プロライフ）だとか中絶権利擁護（プロチョイス）だとかのこのような議論全てに呆れています。そのようなものは唾棄すべきものです。（アダマスは床に唾を吐く真似をする）全くどうでもいいことです。問題とするようなことではありません。しかしドラマとしては、格別なものです。非常に大きな罪悪感をもたらします。あー、それは罪悪感の中でも最も大きなものの一つです。ある者たちが人々の感情に訴えるために利用する最高の題材の一つです。……話が逸れましたね。論点は何でしたっけ？

そうでしたね、私たちは悟りについて話していました。あなたが肉体に自らの本質を注ぎ込んで一体化した瞬間から、あなたのこの生涯は悟りのためにありました。全てがそうでした。この生涯を振り返って、辿って来た道を書き出してみれば分かるでしょう。それは全て悟りのためにありました。

ここで面白いことは——あなたにとってではなく私にとって面白いということですが——あなたの生涯において間違いというものは全くなかったということです。ええ。面白いことに、たとえあなたがそう試みたとしても、間違うということ自体、不可能だったでしょう。さらに面白いことは、あなたが「自分は間違いを犯すことができる」という振りをしていることです。あなたは「世の中には三つの選択肢のドアが存在している」という振りをします。一つ目のドアは、真性のクズ野郎でいることです。二つ目のドアは、そこまで善人ではないが比較的無害な人間でいることです。三つ目のドアは、驚くべき洞察力を持つ人間でいることです。ところがそれは、あなたを永遠の地獄に堕としてしまうかもしれない力なのです。（聴衆からやや笑い）　つまりあなたは、「人は誰しも間違いを犯すものだ」という「集合意識（大衆意識）のプログラミング」を受け入れてしまっているのです。いいでしょうか。あなたが間違いを犯すことはできません。本当にできません。それは不可能なのです。

以前にも話したことがありますが、あなたは、「実際には正しくない」と、「自分本来の在り方とは相容れない」と自分で分かっている方向へ、わざと舵を切ることができます。その後どうなると思いますか？　結局は、「自らの真実の道」へと再び戻されることになるのです。

ちなみに、あなたの真実の道とは、「良い子」でいる道ではありません。あなたの頭の中には、「良いことをしなければならない」とか「良い子でいなればならない」などといった教えがインプットされています。ですが、そのような考えは捨ててください。時に、悟りにおいては、ただ可愛らしくはいられません。良い人ではいられません。時には他の人々があなたのことを好きではなくなることもあるでしょう。しかし、あなたがそのように在ることは、あなた自身にとって正しい選

択なのです。

それはなぜなのでしょうか？　なぜなのでしょうか？　ええ、言いましょう。集合意識（大衆意識）というのは、ある種の「服従」を求めてくるからです。それはあなたに対し、ある決まったやり方で物事を行なうように求めてきます。あなた方の両親の多くは、あなたがただ良い子であることを望んでいました。そして、自分たちが年をとったら老後の世話するように求めました。あなたの先生はあなたに良い子でいるよう求めてきました。なぜでしょうか？　もちろん、彼らにとってその方があなたを扱いやすいからです。「良い子であること」「良い行ないをすること」「正しい言動をすること」という観点から、多くの選択がなされてきました。

では、ここで論点に戻りましょう。悟りに対する多くの期待についてです。

今日あなた方に尋ねる質問は……その前にまず、〈新しい地球〉に視点を移してみることにしましょう。あなたはそこで、これから地球に初めてやって来て肉体を持とうとしている天使的存在に対し、授業を行なっています。あなたは本当に本当に、実際にそれを行なっているのです。あなたは現在、悟りについての話をしているところです。あなたは上級クラスを受け持っている先生であり教授なのです。あなたは今、悟りに関する話をしています。「人間としての自分が抱く、悟りへの期待」と「実際の悟り」との違いについて、それを経験している自分自身の立場から話をしています。

あなたはそこで教えています。仮に第 144 クラスとしましょう。あなたはそのクラスで、特別にデザインされた素敵な演台を使って授業を行なっています———（アダマスは今自分の使っている演台を手で触りながら）ここに引っかいたような傷がありますね。（聴衆から少々笑い）　あなたは新人のためのクラスで教えています。彼らは今から六ヶ月後には、この地球に来て肉体に入ることになっています。ですから期限厳守なのです。あなたがこれから行なおうとしている授業の題名は、「悟りに対する人間の期待について」です。あなたは、人間としての自分が抱いている「悟りへの期待」について、彼らにどのように説明しますか？　それが今日の質問です。リンダがマイクを持っていますので、答えたい人は彼女から受け取ってください。

人間としてのあなたは、悟りに対してどのような期待を抱いていましたか？

ギャレット：みんなが私を好きになると思っていました。

アダマス：みんながあなたを好きになる。実際には？

ギャレット：なりませんね。ある人なんて、ちっともそうなりません。（アダマスも聴衆も大笑い）（訳注：おそらくノーマのこと）

アダマス：その人に代わりに私がキスしなければなりませんね！（アダマスはギャレットと抱擁して頬にキスする）　素晴らしい！　それは素晴らしい答えです。手を挙げても挙げなくても構いませんが、あなた方のうち、どのくらいの人が、「悟りを得てこの輝かしいスピリチュアルな存在になったら、みんなが自分のことを好きになるだろう」と思っていましたか？　（聴衆が何人か手を挙げて）あぁ、ええ。後ろの方にとても正直な人たちが何人かいましたね。こんな感じの人もいましたけど。（アダマスは、ためらいながら少しだけ手を挙げた人の真似をする）

ええ。それは素晴らしい答えです。ああ、私たちはどうしましょうか？　リンダ、書くのと動くのと、どちらがいいですか？板書かマイクか、どちらにします？

リンダ：動いている方がいいわ。

アダマス：分かりました。ではヴィリ、あなたが書いてくれませんか？　今日は全て大文字でお願いします。ただカウルダーを苛つかせるためにね。（聴衆から笑い）

リンダ：なんで全て大文字なの？
アダマス：ミスター乙女座をイライラさせるためですよ。

では、最初に書く言葉は「みんなが……」——その前に「悟りへの期待」という言葉を見出しにしましょう、大文字でね。その下に「みんなが自分を好きになる」と書いてください。実際のところ、この期間は終わりに差し掛かりつつあります——中にはまだその真っ只中にいる人もいますが。人々があなたのことを好きでなくなるという期間です。先月私たちが話したことは何だったでしょうか？　意地悪になること……イライラしたり怒りっぽくなったりすること……明らかにくだらないことやドラマでしかないことに対して、もはや我慢することも寛大でいることもできなくなること。あなたがそのように振る舞うと、彼らの方もあなたのことが好きではなくな

るのです。「どうしたっていうの？　いつからあなたはそんなに高い玉座に座るようになったの？」（聴衆からやや笑い）高い玉座というのは本当は素晴らしいものですよ。（アダマスはくすくすと笑う）

よろしい。では他にありますか？　素晴らしい答えから始まりましたね。

リンダ：じゃあ、聞くわよ。

アダマス：ええ。他には何がありますか？

リンダ：どうぞ立ち上がって。

ダイアン：全ての物事が簡単になると思っていました。

アダマス：簡単！　まさに。あなたはどうして全ての物事が簡単になると思うのでしょうか？　誰がそれをあなたに教えたのでしょう？　どの本に書いてあったのでしょう？（彼女はくすくす笑う）

ダイアン：なぜそうならないのでしょうか？　私は悟っています。ならば物事は何の問題もなくただ楽々とやって来るべきです。

アダマス：ええ、よろしい。それで、そうなっていますか？

ダイアン：まだでーす！（アダマスと聴衆は笑う）

アダマス：私は後ほど「なぜ物事が簡単にならないのか」ということについて、あなたに――あなた方全員に――話をするつもりです。ですが、それも素晴らしい答えです――物事が簡単になる。あなたの人間である部分は、物事が簡単になると思いました。面白いことに――私がこれを言ったらあなたは笑うでしょうが――実際に物事は簡単になるのです。

リンダ：ハッハッハッハッハッ。（リンダのわざとらしい乾いた笑いに、アダマスはくすくすと笑う）

アダマス：実際――

リンダ：笑うのを忘れるくらい面白かったわ。

アダマス：いつの日かあなたが私に向かって、こう言う日が来るでしょう。「本当にとんでもなく簡単でした。あの時の自分がこれを知っていたら良かったのに。」（二、三人が少し笑う）　二人の方はこのことを理解しています。ええ。

リンダ：さっき言った約束は？

アダマス：さて、それはスピリットにとって簡単なのです。本当に簡単です。ですが、人間であるあなたにとってはそうではありません。なぜでしょうか？

ダイアン：ええと、私がまだ悟っていないからじゃないかしら。

アダマス：（座っていた彼女に向かって）良ければ立っていただけますか？（彼女はくすくす笑う）（イーディスが彼女に何か言っていると）イーディス、あなたは次です。（アダマスと聴衆は笑う）

リンダ：私の心を読んだわね！（アダマスはくすくすと笑う）

ダイアン：分かりました、疑いを抱いているからです。

アダマス：疑い。そうですね、もちろんそれもあります。

ダイアン：ええ、そして「でも」や「だって」があるからです。

アダマス：ええ、「でも」や「だって」もあります。加えて言うと、物事が簡単にならないのは、人間が自己保存の欲求を持っているからです。「〈スピリット〉または〈私は在る〉」と「人間」は初め、お互いに足並みを揃えて歩き始めます。ある程度までは歩調を合わせ、一緒にこの悟りの道を進んでいきます。ですが突然、それらは別々の方向に別れ始めます。人間は世の中での人気を得ようとするからです。それがお金に結び付くということは、あなた方にもすぐ分かるでしょう。人間はまた、自分自身のための聖堂を建設しようとします。死を拒絶します。それは全く切りがありません。人間は、全ての中で最も賞賛される存在になることを求めるのです。

かくして人間は、悟りの認識における停滞期に入ります。あなたが悟りに関する本を読んだりそういった教えを聴いたりして初めてこの道に入ったとき、あなたの人間である部分は喜びや情熱にあふれていました。「ああ！　ついに救済される！　私は凄いものを見つけた！　よし、これで全ては簡単

になる！　もう誰にも弄ばれないために私は魔法の力を使う！」 ところが、人間は停滞期に入ります。壁にぶつかります。一方で、〈スピリット〉は前進し続けます。内なる〈私は在る〉は前進し続けます。その結果、この二つの間での葛藤や争いへと発展するのです。といっても実際には、それらの間ではなく、単に人間の中で戦いが起こるだけですが。〈スピリット〉はそういったことを全く気にしないのです。

〈魂の自己〉は本当に全く気にしません。ところが人間は、〈私は在る〉を、自らの「真実と本質」を、人間レベルまで引きずり降ろそうとします――ただしそのようなことは実際には起こり得ないでしょうが。人間は自分が、ひどく悲惨な状況に置かれたり、ドラマに巻き込まれたり、混乱状態に陥ったり、無一文になったり、病気になったりしたとき、初めてこのように言うのです。「あの、少し聞いてもらえるだろうか？
私はこの悟りというものを全く上手く扱えない。そもそも自分の考えが初めからおかしかったんだと思う。人間としての私がこの道を歩み出したとき、実際には、自分が賞賛を受けるとか、少し賢くなるとか、少し若くなるとか、少しお金持ちになるとか、ただそういったことのためだけに、悟りを利用していたように思う。」 そしてついにこう言います。「だから、私はもう認めることにする。悟りこそ、あらゆる中で最も壮大なものであるということを。」

あっ、私がここで授業をしていますね――（と言った後、アダマスが少し後ろに下がったとき、演台にぶつかって飲み物が床に落ちる）

リンダ：あ――！　バシャー、バシャー。

アダマス：おお、私は感情が非常に高ぶっているのです！

リンダ：イーディス、次はあなたよ。

アダマス：ええ、ええ。

リンダ：私はクイッククリーン（洗浄剤）を取ってこなきゃ。

アダマス：ええ。

イーディス：私はまさにコーヒー沐浴をしたわけね。

アダマス：入っていたのはコーヒーではなかったと思いますが、あなたはこれで洗礼を受けたのです。ええ。（聴衆から少々笑い。アダマスもくすくすと笑う）

イーディス：悟りの洗礼ね。（誰かが「主を讃えなさい」と言うと）主を讃えなさい！

アダマス：ですから……よろしい。

イーディス：武器を取りなさい！（聴衆からやや笑い）（訳注：『主を讃え、武器を取れ』（“Praise the Lord and Pass the Ammunition”）という歌がある）

アダマス：さて、あなたの抱いていた悟りへの期待は何でしょうか？

イーディス：期待かどうかは分からないけど、ただ見つけたいと思っていたわね。「自分が本当は誰であったのか」とか「自分が誰であるのか」とか……

アダマス：よろしい。そこでとめておきましょう。

イーディス：「自分はどうしてお金持ちじゃないのか」とか……

アダマス：いえいえ！　先ほどのところでとめておきましょう。（イーディスは大笑いする） 私はそちらの方が好きです！
それをボードに書きましょう――「自分が誰であるかを見出すこと」。間違いなく、その通りです。なぜならこの疑問は……ところでイーディス、あなたはこれまでいくつもの生涯で自分自身にこう尋ねてきました。「私は誰か？」 それについて考え込むのではなく、ただシンプルに「私は誰か？」「私とは何なのか？」と尋ねてきました。それはとても素晴らしい疑問です。そして、そうです、今、あなたはそれに対し何と答えますか？
（彼女がしばらく沈黙していると、誰かが彼女に「私は〈私は在る〉である」とささやく）

イーディス：「私は〈私は在る〉である」。

アダマス：彼女に教えたのは誰です？

イーディス：私は自分が誰であるかを知っているわ！　私は「在るもの」。なぜなら「私は〈私は在る〉である」からよ。私はそれを受け入れているわ。

アダマス: その通りです。ですが、それは私の教科書に書いてあるものをそのまま言っているように聞こえます。

イーディス: ええ、確かに、あなたの言う通りね。

アダマス: 親愛なる人よ、私にはそこに何のハートも感じられませんでした。

イーディス: (彼女は心を込めて)「私は〈私は在る〉である」。

アダマス: 良くなってきてはいます。「私は〈私は在る〉である」。

イーディス: 私はほとんどいつもあなたのことを愛してさえいるのよ。(聴衆から笑い)

アダマス: それ以外のときは何なのでしょう?

イーディス: あなたに腹を立てているわ。

アダマス: 私に?!

イーディス: あなたに。

アダマス: 私はそのとき私のすべきことをしているのですよ。ありがとう。

イーディス: そうね、あなたはそうしているわね。(二人はくすくすと笑う)

アダマス: よろしい。自分が誰であるかを見出すこと。それでイーディス、それは挑戦的で困難なものですが、同時に素晴らしい経験でもありませんでしたか?

イーディス: ええ、そうね。

アダマス: そうです。そうです。あなたは以前に戻りたいですか?
イーディス: いいえ。

アダマス: ええ。では、どうやって前に進もうと思っていますか?

イーディス: ええと、ほら、私の誕生日が――私も獅子座なので――数日後にあって、それが来ると私もいい歳になるのよ。それでね、私はもうここを終えて、あなたのところに行くことになるかもしれないと思っているの。

アダマス: ええ、あなたは「あなた自身」のもとに帰るのです。

イーディス: ふーむ。

アダマス: ええ、あるいは、その中間であなたと会うこともできるでしょうが。

イーディス:〈新しい地球〉でも月でも、私たちが教えているところならどこでも会えますしね。

アダマス: ええ、そうですね。ですが、あなたはどう見ても、あと 30 年、40 年、60 年はまだ掛かりますね。

イーディス: ああ、なんてこと!(アダマスと聴衆は笑う)

アダマス: あなたは今ここにいて、〈新しい地球〉で授業を行なっています。肉体に初めて入る新人たちに教えていて、あなたは――(リンダがアダマスのすぐ前の床を、洗浄剤を吹きかけて拭いているので、聴衆からやや笑い) これは今しなければならないことなのですかね?

イーディス: 彼女はラグを駄目にしたくないのね。

リンダ: これはまさに悟りの一環なのよ。(アダマスと聴衆は笑う)

アダマス: ですがカウルダーの足にまで掛かりましたよ!

リンダ: あら、あなたはそれが偶然だったとでも思っているのかしら?(さらに笑い)

アダマス: では、あなたが奥に行っている間に……(アダマスはリンダにマグカップを差し出す)

リンダ: 何がお好み?

アダマス: クリーム入りのコーヒーを。

リンダ: なに入り？

アダマス: クリーム入りです。ああ、もしくはチャイを。

リンダ: (アダマスの顔をしばし無言で見つめ)……ええ、分かったわ。(誰かが笑いを吹き出したので、リンダも笑う)

アダマス: 私はここがニューエイジのグループだと思っていました。(聴衆から笑い) コーヒーの方が良かったでしょうかね。(アダマスくすくすと笑う) (奥の部屋にいるリンダに向かって)オーガニック・チャイですよ。

リンダ: ええ、分かってるわ！

アダマス: それでどこまで話しましたっけ？ ああ、そうでした。それで、あなたはこの地球にあと 60 年いたいとは思わないのですか？

イーディス: ええと、できることなら……

アダマス: 自分の選択に注意深くあってください。

イーディス: 私は若さを取り戻しておく必要があると思うの。それと、十分な豊かさと新しい車も。

アダマス: あなたの問題は豊かさなのですか？

イーディス: ええ、私は豊かさが止まっていて——

アダマス: (舌打ちして)チッチッチッチッチッチッチッ。

イーディス: それは確かなことなのよ。

アダマス: それは残念ですね、なぜなら——

イーディス: そうなの。

アダマス: 本当の問題と比べれば、そういったことは全く些細なことにすぎないからです。

イーディス: あぁ……

アダマス: 本当の問題。ええ、そうです。私たちはもう少ししたら、このことについて話す予定です。

では次の人。(イーディスに向かって)ありがとう。ありがとう。親愛なる人よ。

イーディス: こちらこそ、どう致しまして。

アダマス: あなたといるのはいつも楽しいものです。

リンダ: イーディス、マイクをジョアンに渡してくれる？

アダマス: いつもです。

イーディス: 私も同じよ。

アダマス: あなたは今夜私のバースデーパーティに出席する予定ですか？

イーディス: ええ。

アダマス: よろしい。よろしい。それがどこで開かれるか知っているのですか。

イーディス: 私たちも参加することになっているのかしら？

アダマス: そうです。

イーディス: それはクリムゾン・カウンシルと一緒にってこと……ああ、そういうわけではないわね。(アダマスはと聴衆は少々笑う)

アダマス: 招待状は受け取りましたか？

イーディス: 受け取った覚えはないんだけど、きっと全て大文字で書いてあったと思うわ。(アダマスと聴衆は大笑い)

アダマス: (アダマスは演台を移動させながら)これは後ろの方に置いておきましょう。これでもう、こぼすことはありませんね。

よろしい。ありがとう、イーディス。ありがとう。あっ、あなた方全員が招待状を受け取っているのですよ、もちろん、ええ。私のパーティは天国の至高通り一番地にあるアセンデッドマスターズ・クラブで開かれます。ええ。(聴衆から笑い) そして真夜中に始まります。ええ。

イーディス：真夜中！

アダマス：真夜中です。もちろん。当然ながら。ええ。

よろしい。次の人。悟りへの期待です。よろしいですか？
ああ、マイクをつけて。

ジョアン：こんにちは。私はもっと偉い人間になると思っていたわ、分かるわよね？

アダマス：では、もっと堂々としてください。

ジョアン：もっと一流っていうか、なんていうか……

アダマス：え、本当ですか？

ジョアン：ほらあの、ただ、なんていうか、ただもっと偉くなると思っていたの。

アダマス：本当に？　大企業を率いるというように？

ジョアン：えっと、仕事についてはかなり上手く行ってるわ。

アダマス：ええ、ええ、ええ。

ジョアン：それは完璧。

アダマス：ですが――

ジョアン：私は仕事を愛してるの。

アダマス：肩書きは何ですか？

ジョアン：ウェルネス・コーディネーター、管理職、ドクターアシスタント。いくつかあるわね。

アダマス：アシスタントという肩書きを持っているのですか？

ジョアン：ええ、ドクターを手伝うの。彼女がいないとき、私が代わりを務めるのよ。

アダマス：あなたが手伝う？

ジョアン：ある程度よ、ええ。

アダマス：本当にそれだけですか？

ジョアン：ああ！　分かったわ、私はそこに存在しています！（彼女は笑う）

アダマス：そうです。あなたは在るのです。ですから、あなた方の中で「アシスタント」や「コーディネーター」や「中間管理職」といった肩書きや名刺を持っている人全員に言いますが、それらの肩書きを受け入れないようにしてください。ありがとう。

リンダ：会社勤めの人に仕事を辞めるよう促すのは、もう止めてくれません？

アダマス：彼らはもっと良い肩書きを名乗るべきだと、私は言っているのです！

リンダ：それならいいわ！（聴衆から笑い）

ジョアン：私は、誰かに聞かれたときにその肩書きを言うだけよ。

アダマス：オール・バイスプレジデント――エグゼクティブ・バイスプレジデント。この方が断然良い肩書きです。

リンダ：あなたがそれを名乗ればいいんじゃないの。

アダマス：さて、あなたは自分がもっと上の肩書きになると思ったわけですね。

ジョアン：ええ！

アダマス：地位がもっと高くなると。

ジョアン：ええ、そうね。でも今もとても楽しく過ごしてるわ。

アダマス：リヴィエラで暮らすように？（訳注：リヴィエラとはフランスからイタリアにかけての地中海沿岸地方の名称。高級リゾート地として有名）
ジョアン：そう！　そんな感じね。

アダマス： ええ。自分のヨットを持って。

ジョアン： そう！

アダマス： ですが本当ですか？ どうしてあなたはそれらを現実化しなかったのでしょう？

ジョアン： 分からないわ。私も自分のしていることを少し探っているんだけど。

アダマス： あぁーー、トイレに行ってください。（彼女は「しまった」という感じで笑う）

リンダ： あーーー！

アダマス： マイクは私にください。

リンダ： あーーー！

アダマス： 今私は禁句を聞きましたよ。ですのでトイレに行ってください。そこに帰ってください。

リンダ： あーーー！ ただ「嫌だ」って言えばいいのよ！

アダマス： 彼女はこう言いました。「分・か・ら・な・い。」

リンダ： あーーー！

アダマス： それはトイレットトーク（下品な言葉）です。（聴衆からやや笑い）

リンダ： あーーー！

アダマス： 非物質的なうんちです。

ジョアン： 私のスピリットをそこに送ったわ、だから……

アダマス： ああ、いいですね。私はそういうのは好きですよ。素晴らしい。賢いですね。賢い。（二人はくすくすと笑う） それでは、あなたはなぜそれを現実化しなかったのですか？

ジョアン： 自分の考え方が変わったからじゃないかしら。

アダマス： ふー。上手い答え方ですが、それは逃げの答えですね。

ジョアン： ええ？

アダマス： あなたはそれらを現実化しなかったのは、それらが「気を逸らすもの」だからです。気を逸らすものです。

ジョアン： そうかもしれないわ。

アダマス： 間違いなくそうです。

ジョアン： そうね。

アダマス： さて、そのようなものは必要ないものですが、実際には多くの人が持っているものでしょう。大帝国を治めるには多くの時間と労力を要します。ですから、あなたはこの生涯では、持てる時間の多くを自分自身に注ぎ込みたかったのです。あなたの人生に気を逸らすものが少なかったのはそういうわけです。私はこの後すぐにそれについて話したいと思います。

ジョアン： ええ。

アダマス： ちなみに、あなたは過去にそういったことを実際にしていたことがあります。あなたは軍隊を持っていました。つまり、あなたは帝国を統治していたことがあるのです。本当です。私はあなたに向かって言っています。

ジョアン： え、私が……そうね。

アダマス： そうです。ですから、あなたはもう一度それをやりたいと本当に思っているのですか？

ジョアン： いえ、もういいわ。

アダマス： ええ。ラリーについても言うと――ええ、奥でお菓子を食べている人ですが――彼も同じなのです。親愛なるラリーは過去において、軍の最高司令官だった生涯や広大な領土を治めていた生涯など、このような生涯を数多く経験したことがあります。（ラリーはその場で気取った歩き方をする） その後、彼はこの生涯にやって来て――ご覧の通り、がっしりとした体格の持ち主ですが――こう言いました。「俺には技術も才能もあるが、もう二度とそういうことはしたくない。そのようなゲームをするのは誰か他の人に任せよう。」

あなた方は皆、自分自身とともに在るために〈安全な空間〉に留まることを許しています。現在のところはまだ、その外側に出ようとしたり、たくさんのことをやり過ぎたり、逆にほとんど何もしなかったり、といったことも時にはあります。しかし、あなたはこの〈安全な空間〉で安らぐことを自分に許しています。ええ。よろしい。ありがとう。

リンダ：次？

アダマス：あともう数人に聞いて、それからこの要点に移りましょう。

イーディス：トイレは立入禁止よ。（聴衆からやや笑い）

アダマス：どうしてですか？　トイレは自分と向き合うには最適の場所ですよ。

アンディ：質問は何でしたかね？

アダマス：悟りへの期待です。あなたは〈新しい地球〉で授業を行なっています。いよいよ本腰を入れてこの地球に降りる準備をしている全ての天使的存在に対して教えています。あなたから少し笑いがこみ上げて来ているのは、「地球で生きることがどのようなものなのか」をあなたが実際に知っているからです。もちろん、彼らは皆ワクワクしています。あなたは、その最終準備が行われている中、彼らに「悟りへの期待」について教えているのです。彼らは上級課程にいます。あなたはこれまで彼らに、人間として生きる作法――奇妙で興味深い作法――について話をしてきました。ですが今、あなたは彼らにこう言っています。「あなたが人間として様々な生涯を経験すると、やがて『あなたの時』がやってきます。そして『目覚め』と『悟り』の旅が始まることでしょう。」 あなたは今、「自分自身が以前抱いていた悟りへの期待」についての話も含め、人間としての自らの経験を彼らに伝えています。

そういうわけで、（アンディに向かって）あなたは彼らに何と伝えますか？

アンディ：何が起こるのか全く分からなかったと伝えます。（アダマスと聴衆は笑う）

アダマス：大変素晴らしい！

アンディ：私は正直、何を期待したらいいのか分からなかったのです。ですが、人間であることが少し変な感じのするものだということは分かっていました。

アダマス：ええ。

アンディ：それは子供の頃にこのように感じた感覚です。「どうして僕は空を飛べないんだろう？　自分が飛べることは知っているのに今は飛べない。僕の何がいけないんだろう？」

アダマス：ええ。

アンディ：ですから、私が思うに、悟りとは「自分をもう一度『正常な状態』に戻してくれるものであると同時に、『正常な人間』ではいられなくなるもの」ではないでしょうか。私の言っている意味が分かりますか？

アダマス：もちろん、完全に分かります。それは自然な状態に戻すものだと。

アンディ：ええ。

アダマス：この今の状態というのは不自然です。とても不自然な状態です。

アンディ：私もそう思います。

アダマス：というのも、それは制限された状態だからです。

アンディ：ええ。

アダマス：ですから、それは自然な状態に戻っていきます。それで、あなたはこの目覚めが始まったとき、そもそも最初からそのことを知っていましたか？

アンディ：私は……うーん……それは「知っていた」というより「感じていた」ものでした。
アダマス：その通り。

アンディ：人間ではない状態の方が正常だと感じられたからです！

アダマス: その通りです。素晴らしい。ええ。素晴らしい。では、私たちはこの「自然な状態に戻ること」をどのように説明したら良いでしょうか？

アンディ: その表現はとてもいいですね。ええ。気に入りました。

アダマス: そうですとも。私が考えたのです。

アンディ: ええ。（アダマスと聴衆は笑う） ええ。

アダマス: 今日は私の誕生日ですから、冗談には乗ってもらわないと。（アダマスと聴衆は笑う） それでは質問です。あなたはその自然な状態に戻っていますか？

アンディ: マインドのプログラミングがいくらか邪魔をしているようなのですが……それを取り除くには時間が掛かるかもしれません。

アダマス: ええ。

アンディ: 社会や義務。

アダマス: ええ。

アンディ: 世の中の色々な物事。

アダマス: ええ、ええ。

アンディ: そういったものが時々邪魔しているようです。

アダマス: 一言、口を挟んでもよろしいですか？

アンディ: ああ、どうぞ。

アダマス: もしかしたらあなたは、それらを少し楽しみ過ぎているのではありませんか？
アンディ: なるほど、それもありますね。

アダマス: それもあります。

アンディ: それもあります。

アダマス: なぜこのように言うかというと――

アンディ: ただここにいるだけで、何かもがとても楽しいですからね。

アダマス: ですが、あなたが悟るとき、当然ながら、あなたは消え去るのです。（聴衆からやや笑い。アダマスもくすくすと笑う）

アンディ: ……それに同意する自信は私にはありません！

アダマス: よろしい。よろしい。上手く伝わったかどうか私にも自信はありませんから。（アダマスと聴衆は笑う）

アンディ: 大丈夫です。ええ、ええ。へまをするのも、失敗するのも、人間であるのも、実際には結構楽しいものですからね。

アダマス: 多少はそうです。多少は。

アンディ: でも、しばらくすれば、そういったことも実際に過去のことになるわけですから。

アダマス: 多少は。

アンディ: そうですね……

アダマス: あなたに少し聞きたいと思うのですが――肉体を持ったマスターというのはほとんどいません。ほとんどのマスターはすぐにここを去ります。ですから、仮にあなたが完全に悟りを得たとしましょう。

アンディ: 私はそうなりますよ。

アダマス: ええ。ああ、そうですね。そのとき、あなたはもうへまをしなくなるでしょうか？

アンディ: ああ……あの……

アダマス: あなたは、イエスがかつて石につまずいて顔面を強打したことがあったと思いますか？
アンディ: でも、私がその最初の人になるかもしれません！

アダマス: ええ、ええ。

アンディ：私は、ほら、いつも少し不格好な感じになりがちでしたから。

アダマス：ですが、あなたはこのようには思わないでしょう？　イエスがパンくずをあご髭に一日中くっつけたまま歩き回ったり、そこで馬鹿なことをしたり……

アンディ：ああ……ええ……

アダマス：鼻水を垂らしっぱなしの状態でいたり……（聴衆から笑い）ええ。つまりそういうことです。

アンディ：そうですね！……あなたがおそらくは正しいんでしょうね。ええ。

アダマス：実際のところ、肉体を持ったマスターはそういったことを気にしたりはしないでしょう。ですから、イエスがパンくずを髭にくっつけていたかなんてことは、どうでも良いことなのです。しかし――私はほとんど断言したいと思いますが――あなた方の多くは実際にこのようなことを敢えて行なうことでしょう。少し汚れた格好でいたり、人々のいる前で一日中こんなことをしてみたり（アダマスは汚れをわざとアピールする仕草をする）、それからこのような態度を取ってみたりします（アダマスは間抜けな笑みを浮かべた表情をする）。（聴衆から笑い）　そして、左右別々な色の靴下を履いてみたりもします。ええ、それは一大事ですね！　普通であれば少し恥ずかしく感じるかもしれないようなことをしてみたりします。

あなたは実際、このようなある種、下品で気持ちの悪いことを敢えて行なうことでしょう。なぜなら最終的にあなたは、他人がどう思うかなど一切気にすることなく、こういったことを行えるようになるからです。あなたが肉体を持ったマスターであるなら、こう言うことでしょう。「だから何？　それがどうしたの。」　あなたはほうれん草が歯に挟まったことがありますか？　あなたがマスターであるとき、あなたはそれを取ろうとする代わりに、他の歯にもそれをくっつけるのです。（聴衆から笑い）　そして、その状態のまま一日中、人々に笑顔で微笑みかけながら――そして自分自身でも可笑しさを感じながら――歩き回ります。それを見た人々はこんな顔をします。（アダマスが目を見開いて驚いた表情をすると、聴衆から笑い）　その中の数人は、あなたにあの表情で合図することでしょう。（アダマスが先ほどの間抜けな笑みを浮かべるので、聴衆から笑い）

私たちはこのことを笑っていますが、間違いなく他の人々もいつの日かこの地点に到達することでしょう。なぜなら、あなたもずいぶん長い間、自分自身を抑制したり、ルールに従ったり、ほうれん草を歯に挟めたままでいないようにしたりしていたからです。ですが、あなたはやがて、何らお構いなしにそういったことができるようになるのです。あなたは本当に気にしません。ただそのまま放おっておきます。ええ。よろしい。本当のことを言えば、あなたは、そのような轍（わだち）に嵌り込んでいる人々に対するちょっとした授業として、今言ったようなことを行なうのです。朝にシャツを着るのを忘れても、「それがどうしたの？」と全く気にしないのです。（聴衆から笑い）

では次の人。悟りへの期待です。ええ。もう二、三人に聞いたら、ここでの要点に入りましょう。

リンダ：それって、気が向いたら私がまたヒップパッドをつけるかもって話のことじゃないわよね？（聴衆からいくらか笑い）（訳注：シャウドの前のウェルカム・アンド・シャーンブラ・ニュースの時に、リンダがジョークとして、先月の「でも（but）」の話に掛けて、お尻（butt）を大きく見せるパッドのようなものを着けて歩き回り、聴衆やジェフリーの笑いを誘っていた）

アダマス：……もう取り外したのですか？

リンダ：もちろんよ。……いいえ！　今もつけてるわ！（聴衆から笑い。アダマスもくすくすと笑う）

アダマス：それでは、キャスリーン。期待です。あなたは悟りに関するたくさんの期待を持っていましたね。私たちはそれについて何度も話したことがあります。それはどのようなものでしたか？　ええ、どうぞ。

キャスリーン：多くはソウルメイトを持つことについてでした。

アダマス：ええ、ええ。

キャスリーン：それは期待でしたが、私は手放しました。

アダマス：ええ。

キャスリーン：ええ。

アダマス：あなたはなぜソウルメイトについての期待を抱いていたのでしょうか？

キャスリーン：（ため息をついて）……分かりません。あっ！（彼女は手で口を塞ぐ）

アダマス：おっと！！　あぁーーーーー！　あぁーーー！（聴衆からも「あぁーーーー」の声）（アダマスは笑う）

キャスリーン：それを言ったのは私自身ではなかったのです。（聴衆から笑いと拍手喝采）

アダマス：ああ、それは……気に入りました！（アダマスは両手の親指を立てて Good のジェスチャーをする）　シャーンブラを見てください、あなたは成長しましたね！　素早く、とても素早く機転が利くようになってきています。大変よろしい！　あぁ、あなたのことをとても誇りに思いますよ。ええ。素晴らしい。あなたは急降下して危うく衝突炎上するところでしたが――

キャスリーン：私のソウルメイトは私自身です。

アダマス：ええ、ですが……そうです。間違いなくそうです。

キャスリーン：はい。

アダマス：ええ。

キャスリーン：それは私自身です。

アダマス：ですが、以前のあなたはそのことを理解していませんでした。スティーブのことを必死に追い求めていました。そのようなソウルメイトを躍起になって探し求めていました。その後、多くの失望がありましたね、親愛なる人よ。多くの悲嘆や苦しみがありました。

キャスリーン：私は自分のソウルメイトが見つかったと思っていました。

アダマス：ええ。

キャスリーン：私はソウルメイトとなら完璧に上手くいくという期待を持っていました。ですが実際にはそうはなりませんでした。なぜなら、私はいつも本当は自分自身を探していたからです。

アダマス：ええ。あなたが受けた大きな悲しみは――私たちはこの後、実際にそのことについて話すつもりですが――あなたがソウルメイトを探していたときの必死さと同じくらい深いものでした。つまり、あなたは――人間たちは――このように思うのです。「もしスピリットがソウルメイトを自分に授けてくれるならば、自分は正しい道にいて、真実を生きているということだ。だからこれは最も重要なことだ。」　そうして人間たちは実際にそれに向けて取り組みを開始します。そのイメージを外側に投影して、その人を探しに行きます。実際にそのような誰かを見つけさえします。そして空想の中で彼――あるいは彼女――を自分のソウルメイトに仕立てあげようとします。本当にそうなのだという理由を探し出そうとします。過去世で一緒だったというストーリーを彼と共有しようとさえします。人間たちはこのような空想の物語をでっち上げようとします。ソウルメイトというのは、人間たちの抱く最も深い、本当に最も深い切望の一つなのです。そして最終的には、大きな失望へと至るのです。「彼は私が思っていた人ではなかった……」という失望です。彼は単にあなたからエネルギーを少し盗もうとしていただけでした。親密な関係や……あー……えーと……

イーディス：セックス。

アダマス：……セックス？　ええ、その通りです、セックスです。ただ、先ほど私が言おうとしていたのは「真夜中のオアシス」という言葉ですが。「私はあなたの何とかになる」とかいう……（聴衆から笑い）（訳注：「真夜中のオアシス」（“Midnight at the Oasis”）という歌がある）　ですが、それはセックスです。セックスのことです。彼は単にそういったものを何でもあなたから少し盗もうとしていただけでした。確かにその時点では真実もいくらかあったかもしれません。もしかしたら過去に本当に一緒だったこともあったかもしれません。地球にやって来る以前のずっとずっと遠い昔から一緒だったのかもしれません。ですが、たとえそうだったとしても、そういったことは全て、ただ「悟りに至る旅」の一部でしかなかったのです。「それが『自分自身へ還る旅』の一部であること」を当然のこととしてください。ただ、それにより、自分に対する深く暗い失望がいくらか生じることもあるでしょう。「どうして私は今までこんな考えを持っていたんだろう？　一体何を

考えていたんだろう？　私が全て間違っていたんだ。」 あなた方もよくご存知の、このような価値判断が始まります。ですが、あなたは間違っていません。そこに間違いは何もありません。

さて、ソウルメイトを持つことについてですが、間違いなくあなたは最終的に次のことを見出すことになります。(1) 自分にはソウルメイトは必要ないということ。(2)「自分自身」こそが自らのソウルメイトであるということ。

それから、私はこのことも伝えておきましょう。これは実際に起こることですが、あなたがひとたび「自分自身の内なる愛」へと戻るなら、そのときあなたは本当の意味でその者を見つけるのです。彼らはもはやソウルメイトではありません。ですが彼らは、どんな義務も束縛もなく、ただ自由かつオープンな形で、あなたと一緒に人生を楽しむことのできる存在です。それはまさに純粋な楽しさそのものです。そうです。それはやって来るでしょう。そうなるでしょう。

リンダ: もう一人？

アダマス: もちろんです。悟りへの期待。ジョシュア、あなたのは何でしょうか？

ジョシュア: 私はもう少し賢くなって鋭い洞察力を持つようになると期待していました。

アダマス: ええ。まず「賢い」という言葉の定義を明確にしてください。どういう意味で言っているのでしょう？

ジョシュア: 自分や他人の人生で起こっている物事の原因や仕組みを知ることができるということです。

アダマス: ええ、賢くなり鋭い洞察力を持つこと。興味深いですね。興味深い。あなたは、ここにいる――もしくはインターネットで見ている――ほとんどの人よりも、ずっとずっとたくさんの勉強をしてきた人です。並外れて高い知能、高度に調整された頭脳を持っています。あなたはこれまで、物理学や宇宙、宗教、形而上学、その他あらゆることを研究してきました。何があなたに起こったのでしょうか？

ジョシュア: ……私はある特定のことに関しては理解してきましたが、ただそれだけでした。大半のことについては、次第に興味が薄れていきました。

アダマス: ええ、そして、これ以外にもう一つあなたに起こったことは、「それを単に勉強するだけでは意味がない」という考えに至ったことでした。神や真の自己がマインドで理解されることは決してないでしょう。決して。それは不可能です。絶対にできません。それについて、ある程度までなら、勉強することはできます。マスターから学ぶことはできます。自分の過去世から学ぶことはできます。しかしながら、それが真に理解されるのはハートにおいてなのです。それは、把握されるのをただ許すということです。マインドによる制限や解釈が存在しない、完全に別のレベルに入るということです。全くもって説明不可能な――説明しようとさえすべきでない――ある地点に戻るということです。それは感じられるものであり、経験されるものなのです。

さて、あなたはこの並外れたマインド、強力なマインドを持っていました。実際にマインドを使ってエネルギーを操作しようとしたこともありました。ですが今、あなたはこの地点に来て、壁に突き当たりました。もはやマインドは基本的に機能しません。それはマインドにとって衝撃的な出来事です。スピリットにとってではありません。何も分からないという状況はマインドにとって衝撃的なことなのです。

あなたは絶望に陥ります。抑鬱状態になります。なぜならマインドは、マインドこそが神だと、あらゆるものの中で最上位のものだと考えていたにもかかわらず、そうではなかったという事実を知ったからです。マインドとは実際、そのようなものでは全くありません。極めて制限されたものです。

真の智慧とは――友よ――真の智慧、真の認識とは、「シンプルさ」なのです。あらゆる全てを取り去ってその本質を直観することなのです。それを数学的に扱うことはできません。実際、どんな言葉や数式でも表すことのできないものです。全てを取り払って、ただ「シンプルさ」の中へと入ってください。

「シンプルさ」に入るには――あなたがもし平静であるのなら――ただシンプルに「私は存在する。私は〈私は在る〉である」と言うだけです。すると、それはそこに在るのです。

あなたはそれについて考え始めます。その詳細を分析しようとし始めます。「『私は〈私は在る〉である』とはどういう意味なのだろう？　この音節はいくつあるのだろう？」「この言葉は、満月の日の何時に言うのが一番良いのだろう？」 です

が、そのようなあなたはもう過ぎ去りました。今、あなたはまさに「私は〈私は在る〉である」を経験することができるのです。

(ジョシュアに向かって)そういうわけであなたは、マインドの外に出るという素晴らしい経験を自分自身にもたらしました。最初は衝撃的でしたが、今では素晴らしい経験です。忘れないでください、この「シンプルさ」を。……ええ。よろしい。ありがとう。
では、あと一人。あなた方は〈新しい地球〉で教えています。ええ、私は楽しんでいますよ。よろしい。どうぞ。

シャーンブラ 1: 私は本で読んだアセンデッドマスターのような存在になると思っていました。

アダマス: ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ！(アダマスはわざと咳き込んでみせる)(聴衆からやや笑い)

シャーンブラ 1: それから……それから……もう一つ。

アダマス: ああ、ええ。

シャーンブラ 1: 女性たちは皆どこにいたのでしょうか？

アダマス: この質問は、今日私が聞いた中で一番のものです。女性！　これには二つの要素があります。あなたは「自分が過去のマスターのような存在になると思っていた」と言いました。

シャーンブラ 1: ええ。それは正しくないと？

アダマス: そうです。それは真実ではありません！

シャーンブラ 1: ふーむ。

アダマス: 彼らは偏屈な老人なのです。(聴衆から笑い)
彼らについて書かれたものはデタラメだらけです。

シャーンブラ 1: 私もそのことには気が付きました。

アダマス: それは全く真実ではありません。あなた方は「イエスはセックスをした」と言うことに後ろめたさを感じます。彼はアセンデッドマスターですらありませんでした。単に集合的な存在でした。アセンデッドマスターのような存在ではなく、ただ集合的な存在でした。彼は実際、あなた方の将来の姿でしたが、実体を持った存在ではありませんでした。

このように言うことは冒涜的なことだと思われていました。せっかくですので、ここで私から一つ声明を出しておきましょう。「彼はアセンデッドマスターではありません。」――そうだと思っている人もいるようですが。そしてムハンマド。彼は脇の下や股の間を掻いていました。彼にも――なんと言うか――「何をやっても全く上手くいかない日」というのがありました。私は何も気にしたりしませんよ。私の親友の中にはイスラム教徒も何人かいるのです。(聴衆から少々笑い)　おかしなことのように思うかもしれませんが、彼らも今夜、私のパーティに出席することになっています。彼らはもちろん、アルコールを飲みませんし、セックスもしません。にもかかわらず、私のパーティに来るのです。(聴衆から多くの笑い)
私が彼らを招くのが好きなのは、彼らにはワインを出さなくてもいいからなのです。(聴衆からやや笑い)……もっと笑ってもいいんですよ！！

リンダ: ハッハッハッ。

アダマス: もっと笑ってくれても大丈夫ですよ。(アダマスはくすくす笑う)

ですから、昔のマスターたち、あぁ、彼らはとても困難なやり方で行ないました。私はあなた方に、ブッダなどの過去のマスターに関するデタラメをマインドから一掃してもらいたいと本当に思っています。あなた方は自分の家にそういった祭壇(仏壇・神棚)を設けています。ああ！　祭壇！(アダマスは頭を抱える)　誰かが祭壇を造り替えてくれたら良いのですが。(聴衆から少し笑い)(訳注: 「祭壇」(altar)と「造り替える」(alter)は発音が同じ)　それらを焼き払ってください！
あなたは真実ではないものを讃えているのです。それは本当に本当に古いものなのです。

シャーンブラ 1: ええ。

アダマス: それらを全て焼き払ってください。もしそういったものを設けたいのであれば、自分自身の写真をそこに掲げてください。

シャーンブラ 1: 鏡ですね。

リンダ: あぁー！

アダマス: 初めは少し変な感じがするかもしれません。あなたの家にやって来た人はこう言うかもしれません。「前にそこにあったのはマリア像じゃなかった？」(聴衆から笑い) 「今飾っているのは……あなたの写真？」 ですが、それで良いのです。お分かりのように、あなたは気にしません。ほうれん草が歯に挟まっていても気にしません。(聴衆からやや笑い) 「そうよ！　私はアセンデッドマスターなの。それは私よ！」(アダマスがその写真にキスをする振りをして、聴衆から笑い)

さて、話を戻しましょう。過去のマスターには女性がいないということです。それはどういうことなのでしょう？

シャーンブラ 1: ええ、どういうことなんですか？

アダマス: 女性はアセンドできないのでしょうか？　なぜ女性はいないのでしょうか？　あなた方がこれまで耳にしてきたのは男性のマスターの話でした。どうしてなのでしょう？ 伝えられる話(History)とは男性の物語(His story)だからです。(聴衆から「あー」と言う声) ええ、それは男性の物語なのです。 (ノーマに向かって)クァン・イェンはアセンドしたのでしょうか？　彼女は女性だったのでしょうか？　彼女はそういったことを気にしたのでしょうか？　違いますね。(アダマスはくすくすと笑う)

さて、まず初めに言っておきたいのは、過去のミステリースクールにはたくさんの女性がいたということです。奇妙に思われるかもしれませんが、男性よりも多かったのです。多くのアセンデッドマスターは女性の身体でその最後の生涯を終えました。これはどういうことなのでしょう？

女性は、誰にも知られることなく、それを成し遂げることができたのです。というのも、男性は皆、戦争で駆けずり回ったり、イエスについて論争したりしていたからです。(聴衆から少々笑い) 女性は家の中にいることができました。もちろん、家事はしていましたが、自分自身と真剣に向き合うことができたのです。

多くの女性が――彼らはもはや「女性」ではありませんが――アセンデッドマスターズ・クラブにはいるのです。

シャーンブラ 1: ええ、ええ。

アダマス: とはいえ、私としては女性的な部分も残しておいてほしいと多少は思っていますが――私は男性でしたので。ですが、女性としての生涯でアセンドしたマスターはたくさんいます。彼らにはそれが可能でした。外側からの要求や圧力といったものを受けずに済んだからです。

シャーンブラ 1: ふーむ。

アダマス: ええ。

シャーンブラ 1: 分かりました。

アダマス: 実際のところ、女性の方が若干、簡単なのです。女性的エネルギーの方がこれを楽に行なえるのです。ええ、女性は男性よりも少し直感力があって、凝り固まっていません。ただし、悟りを得るまでの間、より意地悪になる期間はあります。……(聴衆から何の反応もないので)面白かったでしょう？！(聴衆から笑い) (リンダに向かって)面白かったですよね？(リンダは「ええ」と答える) そうですよね。ありがとう。よろしい。

では、質問はここで終わりにしましょう。

悟りへの期待を捨てる

あなた方は悟りに対してたくさんの期待を抱いていました。それらをまとめてみると、ほとんどはこのボードに書いてあることに要約されます――「自分は完璧になるだろう」「全ての物事は素晴らしいものになるだろう」「お金持ちになるだろう」「みんなが自分のことを好きになるだろう」。ですが実際の現実はと言うと、あなたにはお金がなくて、誰もあなたのことを好きにならなくて、完璧な存在にもなっていません。過去のマスターのようになることもないでしょう。ありがたいことです。実にありがたいことです。

あなたがもしマスターに出くわすことがあって彼らに質問したなら、彼らの誰もが口を揃えてこう言うことでしょう。「私が行なったやり方ではやらないでください。」 彼らはそう言うでしょう。彼らは自分の味わった苦難をあなたに経験してほしくないのです。彼らにいた時代は、今とは完全に異なる時代でした。当時は文字通り、時間が違いました。時間自体が異なっていたのです。エネルギーも違いました。意識も違いました。あらゆる全てが異なっていました。ですから、彼らは

あなたに、自分たちとは異なる方法で、願わくは自分たちが経験したような苦痛や苦悩なしに、それをやるように勧めることでしょう。

ですので、どうかこの瞬間から、悟りへの期待を捨て去るようお願いします。それらを捨ててください。手放してください。手放してください。そうすることにより、あなたは「悟りの動力学」が実際に動き出すのを許すことができるのです。そしてまた、悟りにおける喜びがいくらかやって来るのも許すことができるのです。

二つの動力学

さて、あなたは言います。「ではなぜ私はいまだに悟りを認識できないのだろうか？」 ええ、それには多くの理由がありますが、今、その主要な要因となっているものを二つ挙げることができるでしょう。来月から始まる新シリーズのシャウドまでに、実際にそれを感じてみるようお願いしたいと思います。ちなみに、新シリーズの名称は「発見シリーズ」となります。あなたは「自分が本当はいかに悟った存在か」を発見し始めていくのです。

リンダ: ふーむ。（リンダが拍手すると聴衆からも拍手が起こる）

アダマス: ええ。ありがとう。そうです。新シリーズについてもう一つ言うと、「話はより少なく、楽しみはより多く」というものになるでしょう。ええ、間違いなくそうなります。

さて、現在、ある二つの大きな動力学が存在しています。あなたはその両方に振り回されています。それにより、不安や動揺・行き詰まり感といったものがいくらか生じています。二つの大きな動力学があなたの中で働いているのです。私たちは今、期待について話していますので——（リンダに向かって）「期待」と書いてくれませんか？ 一枚めくって、次の紙の一番上です。「期待」と書いてください。

悟りのアスペクテーション

まず一つ目は——私は次のシャウドまでの間に実際にあなたに目を向けてもらいたいと思っていますが——あなたが悟りを探求するために創造し送り出したアスペクトです。あなたは遠い昔の過去世においてそれらを創造しましたが、それらは実際、この生涯にも持ち込まれています。あなたは、一つや二つといった数ではなく、何十もの「悟りに関係するアスペクト」を創造してきました。それらは、「スピリチュアルな存在や悟った存在、マスターとは〇〇である」というような、悟りに関する様々な期待を抱いています。

ですから、そのようなアスペクトのことを、私はこう呼びたいと思います——「アスペクテーション」（aspectations）。（聴衆から「あぁー」という不満そうな声と多少の笑い）（訳注: 「アスペクト」（aspect）と「期待」（エクスペクテーション expectation）とを掛け合わせた言葉） この言葉は、今日の話を思い出すための助けとなるでしょう。今日は私の誕生日ですので、拍手をお願いしたいと思います。（聴衆はそれに答えて拍手喝采する） 文句や不満があるなら受け付けますよ。

あなたは期待を抱いています。悟りについてのアスペクテーションを持っています。それらの多くは文字通りアスペクトですが、興味深いことに、それらが皆、互いに協調して働いているわけではありません。それらは全て調和しているというわけではないのです。

あなたは様々なアスペクトを持っていますが、私はあなたに実際にそれらを探って調べてみてほしいと思っています。なぜなら——あぁ！ 気が変になってしまいそうですが——あなたの中には「自分自身を今なお貧しい小作人だと見做しているアスペクト」が存在しているからです。このアスペクトは、マスターとは「みすぼらしい服を着て、靴も履かず、施しを受けに小さなカップを持って家々を訪ね歩く者」だと思っています。「真に悟った存在とは貧しい者である」と考えているのです。いわゆる「針の穴」というやつです。（訳注: 「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」というイエスの言葉より） あなたはどこかの時点で、そのようなプログラミングを受け取りました。そして、自分自身のあるべき姿としてそれを受け入れ、いまだに持ち続けています。

あなたは悟りに関する、これとは別のアスペクトも持っています。私やトバイアスから、「あなたは豊かで裕福になるべきだ」という言葉を聞いたアスペクトです。さて、この二つのアスペクトの間で何が起こるのでしょうか？ プゥー！ プゥー！（アダマスは右手と左手を戦わせる） このようになります。一方のアスペクトは言います。「そうだ、私たちは豊かに

なるべきだ。」 あなたは幾分こちらの方を支持していますが、もう一方の、あなたに深く根付いている古いアスペクトはこう言います。「いいや、私たちは貧しくなければならない。全ての人々に奉仕しなければならない。世界を世話しなければならない。」 そういうわけで現在、これら二つのアスペクトの間で衝突が起こっているのです。

悟りに関するアスペクトは言います。「私はもっと勉強して知識を得なければならない。全てのことを知らなければならない。全ての哲学者を知らなければならない。イエスが今までに述べた全てのことを知らなければならない。世界の宗教の全てを知らなければならない……」 ですが、もう一方のアスペクトは言います。「そのどれも重要ではない。そのようなものは皆、実際には重要ではない。」 それらは衝突し戦っています。ですが時に、その知的なアスペクトは、細かな知識――些細な情報や数字や日時など――を全て放棄し始め、シンプルさを志向しているアスペクトにわざと調子を合わせてくるでしょう。そしてその後、自らの知力の全てを使って自分がどれほど賢いかを誇示し、そのシンプルなアスペクトを圧倒して、その無能さを分からせようとするのです。「あぁ、私は本当に何も知らないんだ。私にはまだ悟りはふさわしくない。」 このように思わせようとします。知っての通り、この戦いは一進一退を繰り返しています。

あるアスペクトはこう言います。「悟り。私は、周囲に輝きを放つ完璧な身体を持つ。もちろん、決して歳を取ることのない、チョコチップクッキーのような香りがする身体だ。」（聴衆から少々笑い） すると、悟りのアスペクトが言います。「この肉体というものはただ一時的なものでしかない。実際それは私の悟りを制限しているものだ。私を悟りから遠ざけているのはこの肉体なのだ。」 さらに別のアスペクトは言います。「悟ったら、私はこの肉体を持って自分の〈第三サークル〉に行くつもりだ。そして、アダマスのパーティに出席するためにアセンデッドマスターズ・クラブにも行くつもりだ。」 これら三つのアスペクトは衝突して互いに戦っています。あなたはこのような悟りのアスペクテーション（悟りへの期待を抱いているアスペクト）を持っているのです。私は是非とも、あなたにそれらの存在に気づいてもらいたいと思っています。

ただしその際、あなたが陥りがちなことが一つあります。「これらのアスペクトの詳細を調べようと、その中に深く入って感じようとしてしまう」ということです。アーンドラは何が起こるか正確に知っています。それらはあなたを自らの中に引きずり込もうとするのです。「自分たちこそあなたなのだ」とあなたに思わせようとします。ですから、少し距離を取って離れたところからそれらを観察してください。中立の場所から観察してください。それらの思考や感情に引き込まれないようにしてください。決して巻き込まれないようにしてください。それらがどのように機能しているかを、ただ観察してください。

そうです、それらはあなたの一部分です。間違いなく。ですがあなたは、それら全てのアスペクテーションが――悟りへの期待を抱いているアスペクトが――どのようにそこに居座っているかを観察することができるのです。

さて、これからあなたが行なっていくこと、それは「この全てのアスペクトを統合していく」ということです。無理やり行なうのではなく、知性によって行なうのでもなく、あなたはそれら全てを統合していきます。深くたっぷりとした呼吸を通して、〈私は在る〉の中へと統合していきます。「あなた」の中へと、「あなたの真実」の中へと、「あなた自身の愛」の中へと、深く十分な呼吸を通して統合していくのです。

あなたは、自分自身を愛することによって、全てのアスペクトを統合していくのです。今に至るまであなたが間違いを犯したことはありません。一度たりともありません。いつかそれを笑える日が来ることでしょう。あなたが過ちを犯したことは一度もありません。間違ったことをしでかしたことは一度もありません。あなたはどんな悪いカルマも持っていません。そのようなものは一切存在しません。ですから、あなたは心置きなく自分自身を愛することができるのです。深い後悔も罪悪感もありません。あなたは思う存分、自由に自分自身を愛して良いのです。

あなたはこの悟りのアスペクテーション――悟りへの期待を抱くアスペクト――を統合していきます。

私が今このことを取り上げているのは――とりわけ私たちが来月から「発見シリーズ」に進んでいくに当たって――そのようなアスペクトがいまだに居座り続けている状況はもはや終わりにすべきと思うからです。私があなたに望んでいることは、（1）それらアスペクトの存在を認識し、それらがどのように自分に作用し影響を及ぼしているかを理解すること、（2）自分自身を愛することによってそれらを統合していくこと、（3）それらの機能する動力学を活用すること、です。というのも実際、全てのアスペクトはあなたに仕えているからです。

それらはこれまで真実を探し求めてきました。あなたのために様々な可能性を探究してきました。あなたがそれらを統合するとき、全てはあなたに仕えるためにやって来るのです。

キャスペクテーション

では、もう一つのものです。これは説明するのがより難しいのですが、他の人々についてです。

リンダ： うーむ。

アダマス： うーむ。うーむ。あぁ、私たちはこの話に入って行くべきなのでしょうか？ （ケリーが飲み物を飲みに行こうとして立ち上がると）今出て行くことはできませんよ、ケリー。（聴衆から笑い）

ケリー： 別に怖気づいたわけじゃないわよ。

アダマス： 他の人々について。この話はあまり好かれないテーマでしょうが、構うことなく話を進めたいと思います。

おそらく、あなたの悟りにとって最も大きな障害となっているのは他の人々です。彼らは大抵、あなたが「私は悟りを得る」と言うのを、とても乱暴な発言だと考えます。自己中心的なものだと、家族やそういったもの全てをバラバラに壊してしまうものだと考えます。ですが家族というものは、あなたが悟ろうが悟るまいが関係なく、勝手にバラバラになるものなのです。それは面白いものでした。（聴衆からやや笑い） それは悟りと無関係です。しかし、あなたの悟りの妨げとなっているのは他の人々なのです。より具体的に言えば、あなたの最も身近にいる人たちです。つまり、あなたのパートナーや配偶者、あなたの子供や両親、子供や両親、子供や両親（アダマスはくすくすと笑う）、それから、あなたの大切な人やあなたとベッドを共にする愛人といった人たちです、イーディス。このような――

イーディス： 愛人がいたらいいんですけどね。（アダマスと聴衆は笑う）

アダマス： このような人々の存在は、人生において最も大きな喜びをもたらしてくれるものの一つですが、同時に、あなたが悟りを認識するのを真に妨げているものでもあります。

では、あなたはどうすべきなのでしょう？ 荷物をまとめてそこから出て行くのでしょうか？ 彼らの前から立ち去れば良いのでしょうか？ 一人で森の中で暮らせば良いのでしょうか？ 必ずしもそうする必要はありません。そこまでしなくても良いのです。

ですが、今この瞬間から、次のことを理解するようにしてください。すなわち、あなたにとって最も身近な存在である彼らは、あなたが自分自身の不調和を投影している人たちなのだということです。あなたは自分の恐れを彼らに投影しています。自分の虚しさや空虚感を投影しています。自分の感情のボタンを投影しています。あなたは自分自身のエゴや不調和を彼らに直接、投影しているのです。一方、彼らはと言うと、あなたのことを愛しているためにそれらを受け入れています。ただし、あなたもまた彼らと同じことをしているのです。彼らの存在はあなたにとって鏡のようなものであり、彼らにとってはあなたの存在が鏡となっています。

あなたは自分の中のものを彼らに投影し、彼らはあなたにそれらを映し返します。彼らはあなたとの間でこのようなことが行なわれるのを許しています。あなたにとって彼らの存在は、あらゆる中で最高の教師なのです。ですが今、あなたはもはやそういったものを他人に投影すべきではない地点まで来ています。ですから、「悟りを妨げているのは他の人々――あなたの最愛の人や最も身近にいる人たち――なのだ」と私が言うとき、「実際はあなた自身が彼らを通してそうしているのだ」ということを理解するようにしてください。「自分の中のものを彼らに投げつけ、それらを彼らから投げ返される」というゲームをやっているのは、あなたなのです。

彼らはあなたの感情のボタンを押します。あなたが彼らにそれを預けたからです。彼らはあなたの抱えている心の傷を刺激します。あなたが彼らを通してそれを見るために、自分のハートを彼らに差し出したからです。彼らがそうするのは彼らが酷い人たちだからではありません。実際のところ、彼らは素敵な人たちであり、あなたのことを愛しています。彼らは多くのことを我慢しています。あなたが彼らの多くのことを我慢しているようにです。しかしながら、自己を見出すために他の人々を利用するというこの行動は、完全に終わわせる必要があります。

あらゆる人が自分以外の全ての人に対して、これを行なっ

ています。ちなみに、人間関係の多くが上手くいかなかったり、長続きしなかったりするのは、そういう理由からです。ある時点で、もはや「他人の中に自分自身を見るということ」に我慢できなくなるのです。相手を責めたり批難したりしますが、実際には単に「相手の中に自分自身を見ること」に耐えられなくなっただけなのです。ただし、ある時点で「もはや他人を通してそのようなことをする必要はないのだ」と気づく人もいます。

そうなると、一つの疑問が生じます。「真実で本物の、純粋な人間関係というものは望めるのか？」ということです。それはあなた次第です。あなた次第です。ですが人間関係のほとんどは、自分自身を他人に投影するという投影ゲームなのです。

さて、私たちは今期待についての話をしていますので、私はこれを「キャスペクテーション」（caspectations）と呼びたいと思います。（聴衆から「あぁー」という不満の声と笑い）（訳注:「投影する／出演者」（キャスト cast）と「期待」（エクスペクテーション expectation）とを掛け合わせた言葉）（リンダに向かって）この言葉を書いてもらえますか？　なぜなら、彼らはあなたの人生の出演者でもあるからです。テレビドラマや演劇に出てくる登場人物のようなものです。彼らはあなたの人生の出演者です。登場人物です。しかしある時点で、あなたの一人舞台となるときがやって来ます。あなたは自立します。あなただけの舞台となります。もはや他人を利用するということはありません。ただあなた独りで立つのです。あなた自身の「〈存在そのもの〉である自己」（I Am Presence）において、独立するのです。

あなたがその地点に至るとき、自らの〈私は在る〉に誠実であるとき、他人の人生の出演者になるのではなくただ〈私は在る〉として在るとき、あなたは素晴らしいことに気づくでしょう。自分がこれまで投影したアスペクトの全て、自分の過去の輝かしいアスペクトの全て、完全に統合されたアスペクトの全てが存在していることに気づくでしょう。そして、もはや他人を全く必要としないことに気づくでしょう。あなたは、かつて彼らを利用していた頃のようには、彼らを必要としなくなるのです。

さて、ここでジレンマがあります。あなたは現在、誰かと共に生活しています。自分の子供や妻や夫、両親とさえ一緒に暮らしています。そしてそこでは「彼らを通して自分自身を見出す」というゲームが続いています。しかし、悟りあるいは目覚めのある段階に到達した時点で、それは終わりにしなければならないのです。

今おそらく、文脈を無視してこの言葉を受け取る人がいることでしょう。彼らはこう言います。「アダマスは家族から離れるように言っている。赤ちゃんを見捨てて、両親のもとから立ち去るように言っている。彼らのことは気にするなと。」
私はそんなことは言っていません。このことは明確にしておきたいと思います。私はそのようなことは一切言っていません。

私はこのゲームを終わらせるように言っているのです。自分自身を見るために他人を利用するというやり方は終わりにしてください。たとえそれがガイドや天使であっても他の誰であっても、自分自身を見出すために自分以外の者を利用する行為は、もう終わりにしてください。今この瞬間から、「自分自身を見出すことができるのは自分だけなのだ」と理解してください。妻や夫や子供を通して、自分以外の誰を通しても、そうすることはできないのです。

では、あなたが「このような関係性は手放し解放する」と自らの中で選択するとき、実際にそれは変化するのでしょうか？彼らとの現実的な人間関係に変化があるのでしょうか？　エネルギー的な関係性はどうでしょう？　カルマ的な関係性は？　それらはなくなるのでしょうか？　何とも言えません。ですが、そういったことは本質的な問題ではないのです。

代わりにこう言いましょう。あなたは何もする必要はありません。帰宅してからこのようなことを言う必要はありません。「そうだ、アダマスは今日私たちに発破をかけた。私は今決断しなければならない。このぐうたらな夫と離婚すべきだろうか？」　私はそのようなことは一言も言っていません。

私が言っているのは、あなたが「関係性の動力学を変える」「キャスペクテーション（自分の人生の出演者に対する期待）を変える」と選択するということです。それにより、そのほかの関係性の動力学もまた変化することでしょう。あなたは何もする必要はありません。明日、離婚弁護士に電話をかける必要はありません。関係性は、ただそれ自身で、自然にバランスを取ることでしょう。
ただ、そうは言っても、ドラマや騒動がなくなるということではありません。人間は人間だからです。あなたの周りの人々は、あなたとの間に今までのような繋がりがなくなっていると感じた途端、ひどく動揺します。そして、取り乱しなが

らこう言います。「一体何があったの？　あのカルト集会で何をしているの？　彼らに何を吹き込まれたの？」　ええ、そういったこと全てです。そのときこそ、深く呼吸をするときです。そうすれば、エネルギーの大きな変化がいくらか起こることもあり得るでしょう。

ですが、あなたのこの選択は、彼ら周囲の人々やあなた自身に捧げる最も美しい贈り物となり得るものです。それは解放をもたします。非常に古いエネルギー的な束縛からあなた方を解き放つものとなるのです。

そういうわけで、悟りに関する問題や懸念、悟りを阻害するものの最上位に位置するのは、他の人々だと言って良いでしょう。他の人々です。あなたは「自分が悟りを求めたりすると彼らは気を悪くしてしまうかもしれない」と恐れているために、悟りを望みません。長年にわたって築かれた彼らとの関係性のために、それを得たいとは思いません。あなたは「自分はまだそのような関係性を解放する準備ができていないのではないか」とすら考えているかもしれません。

ですが――親愛なる友よ――始めにも言ったように、あなたは、自らの悟りを認識するにおいて、もはやガイダンスがほとんどない地点に来ているのです。他の人々や友人たちとの以前のような関係性の多くがなくなる地点に来ているのです。と言ってもそれは、彼らがあなたの前から姿を消すということを即、意味しているわけではありません。単に、彼らとの関係性に変化が生じるということを言っているだけです。

彼らが実際に離れていくかどうか、それは私には分かりません。実際に何が起こるかは分かりません。ですがあなたは今、深い呼吸をともに「全てが悟りのためにあること」を当然だと見做す地点に来ているのです。あなたは「最大限の愛とともに行動している自分」を当然のこととします。それは第一に自分自身への愛であり、そして共に愛を分かち合っている人たちへの愛です。この場所は、「〈私は在る〉にとってあらゆる創造が喜びであること」を当然だと見做す地点であり、そのことを信頼する地点なのです。

その認識とともに、深く呼吸を行ないましょう。

自由のための〈メラブ〉

今日は自由シリーズ最後のシャウドですので、自由のための〈メラブ〉を少しの時間行なうこととしましょう。照明を落としてください。できるなら、BGM にちょっとした〈メラブ〉音楽を掛けましょう。

（音楽が流れ始める（『Liquid Mind』からの楽曲））

〈メラブ〉は、とても美しい時間です。私たちは今日この部屋の中に、〈メラブ〉のためのエネルギーあるいはフィーリングを少し蓄えておきました。ですから私たちは今、ただ深く呼吸するだけで良いのです。何かと苦闘する必要はありません。私たちが今日話したことについて考える必要すらありません。それに取り組んだり、それを勉強したりする必要はありません。

それを懇願する必要はありません。

〈メラブ〉とは、「ただそうなるのを許す」という、素晴らしいひとときです。

そこにエネルギーの操作はありません。

ただ深い呼吸だけがあります。

過去 10 回のシャウドで、私たちは自由について話してきました。ですが実際のところ、それは「制限」についての話でした。私たちは、まさに愛情を込めて、一つ一つ、制限を解放していきました。

ああ、時にそれは本当に恐ろしいものであったかもしれません。ですが同時に、多くを解放し自由にするものでした。

私たちは、人間マインドや人間アスペクトによる制限から自分自身を自由にすることについて話してきました。人間アスペクトというこの愛情あふれる存在は、とても打たれ強いのです。あぁ！　それは正しい行ないをしたいと強く望んでいる一方で、何が実際に正しいことなのか分からないとも感じているのです。

私たちが行なうこととは何なのでしょう？　人間アスペクトの制限から自分自身を解放し、自由にすることです。そして、人間の抱く本物の愛が〈私は在る〉の中に統合されていくのを許すことです。

人間たちは、愛と対立するものや愛に関する課題を数多く抱えながらも、たくさんの愛もまたその中に抱いています。この創造世界において、人間以上に多くの愛を抱いている存在など、私は思い付くことすらできません。人間という存在は、とても愛情にあふれ、正しいことをしたいと真に求めていますが、それゆえに、自分自身を非常に厳しく評価しています。自らの基準をとても高く設定し、愛に関することで失敗すると――彼らが失敗と呼んでいることを経験すると――激しく動揺します。人間は愛に関して、この世界に存在するどんな者たちよりも遥かに多くのことを、絶えず学んでいるのです。

そして私たちは今、この自由シリーズを終えようとしています。

このシリーズであなたは、自分自身を制限していた物事に目を向ける機会を持ちました。中には楽しいものもありましたが、「あなたがこの地球で肉体を持ちながら、真実の〈私は在る〉を感じ経験すること」を極めて制限し妨げていたものもありました。そのように制限された状態というのは大変なフラストレーションをもたらすものでした。一部には「永遠にこのままなのではないか」と感じられるような制限もありました。

では、深く呼吸してください。そして、真の自由の中へと入っていってください。

自由。悟り。この二つの言葉は相互に入れ替えて使うことができるものです。

（小休止）

しばらくの間、その中に入ってただ感じてください。先ほども尋ねましたが、このスピリチュアルな道、この目覚めが始まったとき――2000 年前かもしれませんし、800 年前かもしれませんが――そのとき何が起きていたのでしょうか？

あなたの中で何が生じたのでしょうか？

何があなたに「なぜなのか？　どうしてなのか？」と自問させたのでしょうか？　それについて自問する人間はあまりいません。にもかかわらず、あなたの中にある何かが、「なぜ？」「どうして？」とあなたに自問させました。

「私は誰か？」とあなたに自問させたのは何だったのでしょうか？

（小休止）

親愛なる友よ、それはアスペクトでした。ああ、それは真実の問いでした。極めて正当な問いでした。ですが、それはアスペクトでした。

そのアスペクトは今どこに存在しているのでしょう？　探究の旅に出た、あなたのその部分は、今どこにいるのでしょう？

それは今、帰還できるのでしょうか？

今あなたのもとに戻って来られるのでしょうか？

あなたは再びそれを見つけ出せるのでしょうか？

もはやそれを自分の外側に置いておく必要はありません。天上の回廊で彷徨わせておく必要はありません。しかし、それは今、この肉体を持ったあなたのもとに帰って来ることができるのでしょうか？　そして再び見出されることはあるのでしょうか？

ただ当たり前に自分の家に帰って来るかのように……

ただこう言ってください。「一緒に経験しよう。一緒になろう。一緒に自己を見出そう。」

「終わりのない探究や放浪はもう止めにしよう。〈私は在る〉の経験の中にともに留まろう。」

自由な存在……悟っている存在……

ところで、悟りとは旅の終わりを意味するものではありません。悟りとはただ、自分が旅をしていること、自分が経験していることに、気づくことなのです。

悟りは旅の終わりを意味しません。実際には「楽しいことの始まり」を意味しているのです。次の「発見シリーズ」において、私たちはそのことに入っていくつもりです。

深くたっぷりとした呼吸をしましょう。ああ！　深くたっぷりと

した呼吸です。

悟りへの期待。自分の悟りを邪魔しているかに見える周囲の人々。結局のところ、そのようなものは全て、都合のいい言い訳にすぎません。私たちはもはやそういったものを越えていく時なのです。それら全てから自らを解き放ち、自由にする時なのです。

深くたっぷりとした呼吸をしてください。

親愛なる友よ、あなた方はこの後アーンドラの誘導する呼吸をするわけですが、私は自分の誕生日パーティに向かわねばなりません。あなた方は全員招待されていますので、そこに行く自分なりの道を見つけてください。場所はアセンデッドマスターズ・クラブです。あなたの名前はリストに載っています。

それから、宇宙の裏道を通ってそこに行くときも、このことは忘れずに覚えておいてください。全創造において、全ては上手く行っているということを。

そして既にそう在ります。（And so it is.） ありがとう。（何人かが「誕生日おめでとう」と声を掛ける） そして自分に、誕生日おめでとう。

翻訳：dai